

大学改革と大学図書館

土屋俊

(千葉大学附属図書館)

(<http://CogSci.L.chiba-u.ac.jp/tutiya/Talks/>)

話題の予定

1. 社会の情報化の現段階:大学図書館を取り巻くグローバルな環境の変化
2. 日本の大学の将来:「大学改革」の課題と図書館
3. 情報化時代の大学改革における大学図書館
 1. 教育機関としての大学の社会的責任と大学図書館
 1. 教育のための図書館の実現(選書における教員と図書館)
 2. 学生が集う図書館というイメージ
 3. 生涯学習と大学図書館
 2. 研究機関としての大学の社会的責任と大学図書館
 1. 学術的コミュニケーションの変容は起こるか(電子ジャーナルなど)
 2. 知的財産権運用の専門家としての図書館
 3. 電子化の必然性とその帰結
 1. 電子図書館と図書館電子化
 2. 図書館運営における教員の主体的役割
 3. 大学の情報基盤は図書館図書館から

社会の情報化の現段階

- インターネットブーム時代の終焉
 - 1993年 NII(通信と放送の融合)
 - 1995年 グローバル化
(国会関西館構想、電子図書館建議)
 - 1996年 日本での爆発
 - 1997年 Digital Divideとインフラ化(cf.蒸気機関)
- インフラとしてのインターネット基盤
 - ラップトップ、ノート型普及、Iモードの展開、WAP規格
 - 電子図書館としてのWeb
 - Eコマースの意味

データ通信ネットワークをインフラとする社会においてそもそも図書館の役割とは、大学の役割とは、大学図書館の役割とは？
(そんなことで、それらの役割が変わるなんて不思議だが、、、)

大学改革？

- 高等教育の状況
 - アメリカ・(日本)型(50%)
 - イギリス・ドイツ型(30%)
 - フランス・ヨーロッパ型(10%)
 - 発展途上国型
- 日本の大学改革
 - American Research University/Undergraduate 4-year College体制への移行？

高等教育・先端研究・資料基盤

- 大学の教育機関としての社会的役割
 - 学部レベル教育の教養化
 - 修士レベル教育の非学問化

学生から見て使える学習図書館
- 研究機関としての社会的役割
 - 先端研究の推進(学術情報の円滑な流通)
 - 研究成果の移転の推進(情報発信)

研究者から見て使える研究支援機能
(本はすでに消えている)

大学図書館の機能は、大学の機能から演繹されるべきである

教育のための品揃え

- 学生用図書の圧倒的不足
 - 国大図協の調査(1998年) 1人0.6冊
 - もう遅い、誰の責任か(図書館の責任ではない)、国民的不見識(自民党文教部会報告)
- そもそも学生は本を読むのか、読ませることに意味があるのか
 - 「受験勉強が忙しくて、本を読む暇がない」
 - 教員は本を読んでいるのか？
 - 何のための教育？研究よりも読書
 - 情報リテラシー教育の課題はここにもある

学生が集う図書館というイメージ

- (学習) 図書館は静かであるべきか？
 - 図書館という安全な空間
 - 文房具としてのノート型パソコン
- 学習の場であるということは、
 - 息抜きができること
 - 「文化的」であること(本に囲まれたコンパ？)
- 含む
- 情報リテラシー教育の位置づけ

生涯学習と大学図書館

- 地域の情報(学術的)
- 図書館の開放、地域の異館種との分業
- 生涯学習こそが大学が生きる道
 - 半分以上が24歳以上になる日は近い(アメリカなみ)
- この目的から演繹される図書館の役割
 - 場所
 - 中身
 - Walk-in Useの正当化

図書館運営における教員の役割

- 図書館資料の収集への責任
 - 学習用: 教員として
 - 研究目的資料: 研究者として
 - 千葉大学の試み(資料予算の一本化、基本的外国雑誌、キャンパスグレイリテラチャの体系化)
- しかし、自覚は欠如している
 - 技術の進歩について知っているか(自分の研究方法でやっているかと盲信、「電子ジャーナル問題」で顕著)
 - 学生のために本を買うという自覚はあるか(研究室に本を置く意味は?)

電子図書館と図書館自動化

(建議という間違いは別にして)

- 「電子図書館とは何か」がわからなかった
奈良先端の不見識
目玉電子化方式
二流論文収集方式
標準化努力欠如
 需要研究の欠如(誰のため、何のため)
- 今、電子図書館の姿が見えてきている
 - アクセス(利用): 学生向けと研究者向け
 - プリザベーション(保存)の二義性
- 図書館員のスキルの問題はもうない

情報化による

学術的コミュニケーションの変容？

基本的には1980年代インターネットによって
研究者が自分でコミュニケーションを制御
できるようになったということ

現実にはそうは展開していない

- － 学術雑誌はどうなるか？
- － 学会はどうなるか？
- － 授業で使う教科書はどうなるか？
- － 小部数専門出版はどうなるか？

学術雑誌はどうなるか？

(オンラインジャーナル問題の現状)

- 出版社系と学協会系に分かれる
 - 出版社系：価格設定方式 (pricing policy) をめぐるせめぎ合いの最中
 - 学協会系：会員優遇、会費随伴方式へのシフト
- いずれの場合も、コンソーシアム契約の有効性と問題点が明らかに
 - 割引率上昇、紙媒体の集中化 (省スペース)
 - 予算集中化と会計規則、保存性 (バックーイッシュュー、出版社がつぶれたら？)

いずれにせよ、実は、教員はわかってない！

大学図書館は知的財産権のプロ

- 大学は、著作権者の集団である
- 図書館に求められる著作権教育機能
- いわゆる日本複写権センターとの交渉とは？
 - 大学図書館は不法コピーの無法地帯という認識
 - 原因としてのコイン式コピー機
 - 事前審査・事後点検の原則の要求
 - 実務要項(A)の提示と受け入れ(?)(平成11,12年)
 - FAX送信問題(すでにやっていたことになっている)
 - ILLからDDへ
 - キャンパス内試行(北大、千葉大など)、文部省協力者会議(学習情報課)、著作権審議会ワーキンググループ設置

大学図書館は学術目的のために全部でひとつという原則を

知的生産者を代表する立場 としての大学図書館

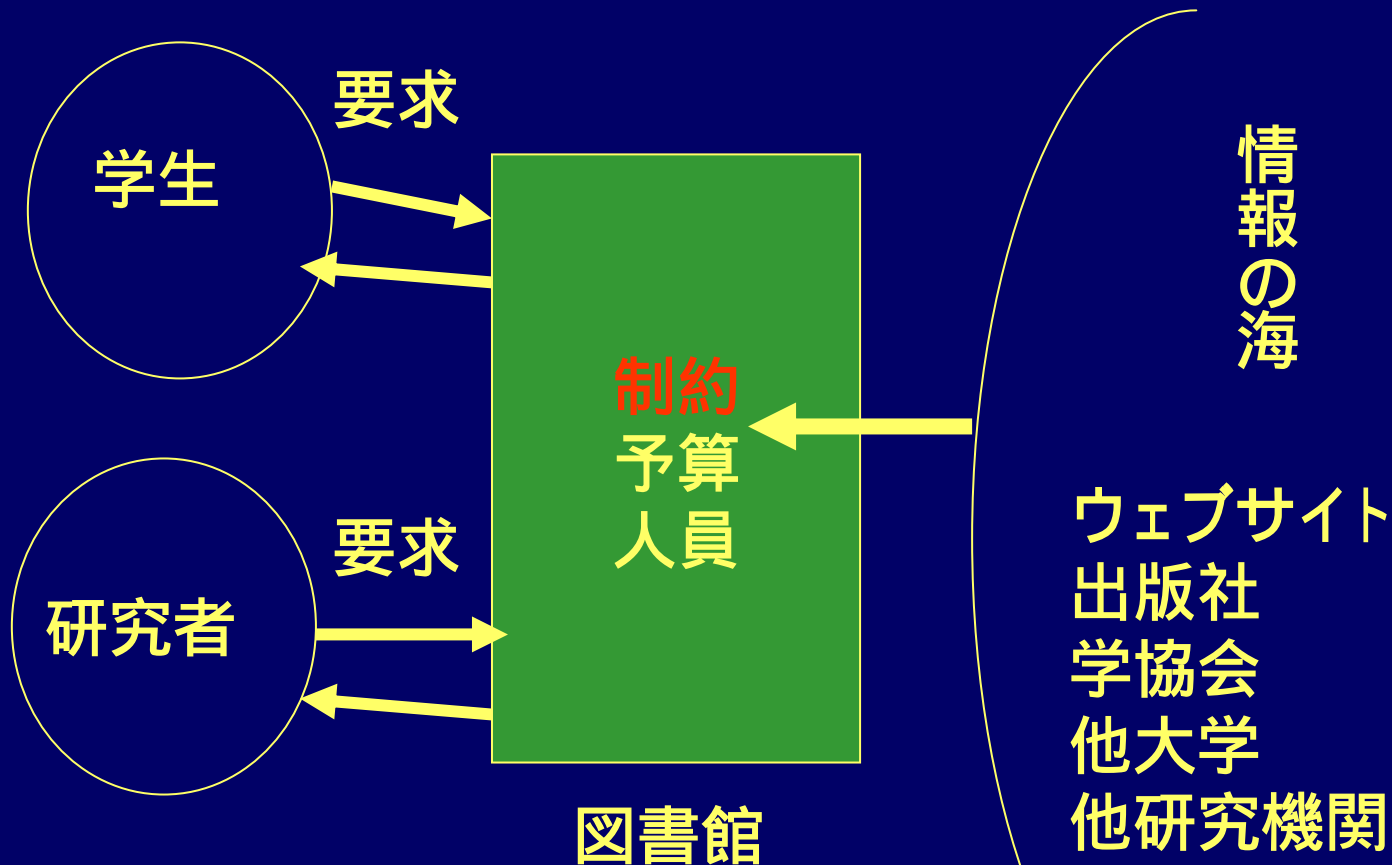
- 学内生産資源の集約
 - 学位論文
 - 学内WEBページ検索エンジン
 - 研究者情報、研究協力部門との協力
- 公開のゲートウェイ
 - 目録情報の公開
 - 文書、データの公開

本当に必要なレファレンス・サービスとは

- 基礎的な探索技術は、すべての人が身につける ← **情報リテラシー教育**(の目標) + FAQ (Frequently Asked Questions)方式
- したがって(しかし?)、図書館ではどのようなレファレンスが必要?
- 教員は、何を求めるのか
 - 自分の境界領域での文献渉猟・文献探索
 - 見落としのチェック
 - など

アクセスとゲートウェイ

ゲートウェイからインターフェイスへ

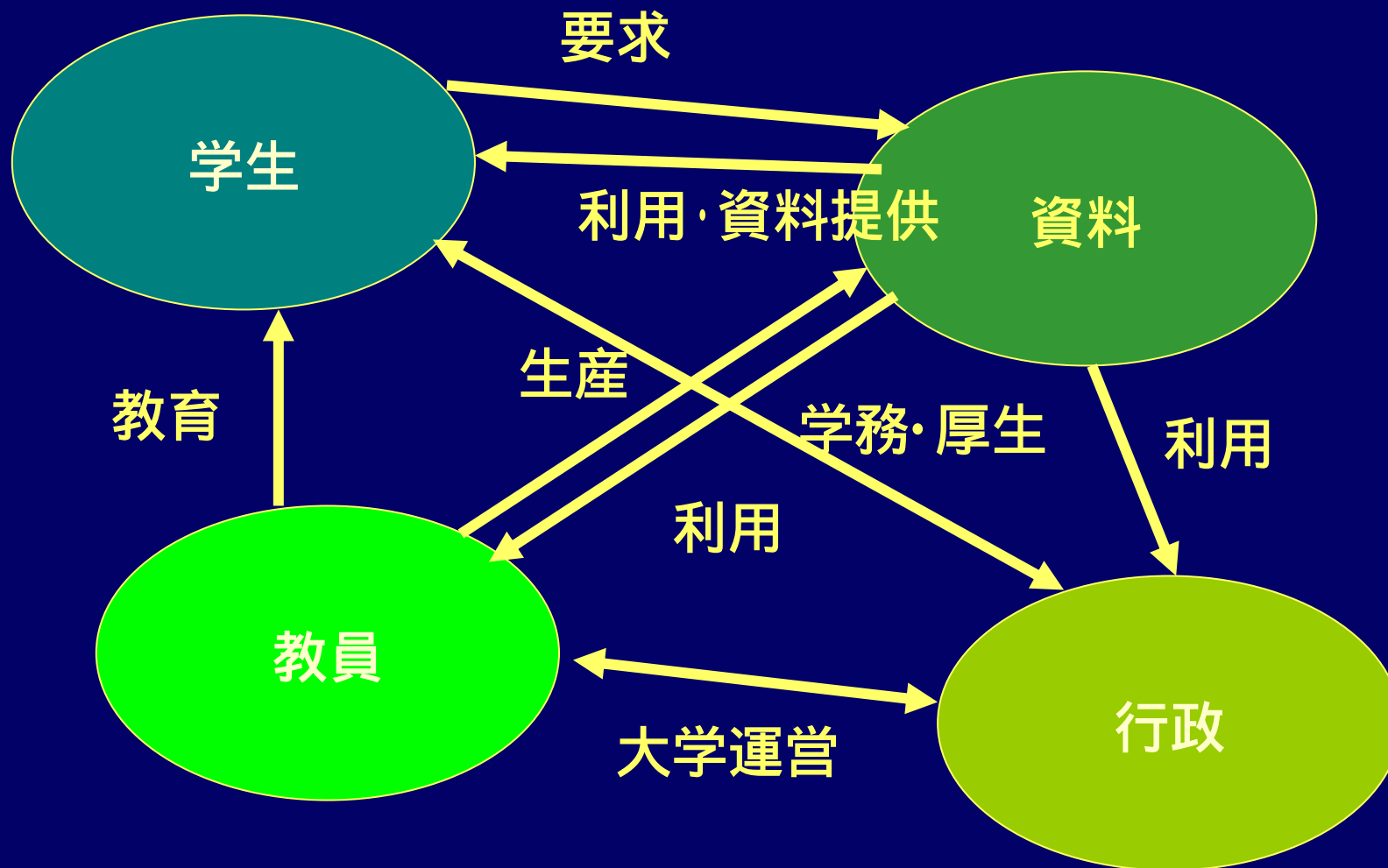


インターフェイスからアクセス・ファシリテータへ

21世紀のキャンパス像(日本の)

- 学生が自分の条件に応じて、自分で学べる環境(パートタイム学生・進路変更学生の増加、いわゆる学力低下)
- 対面教育と遠隔・時差教育の使い分け(教室の意味の再定義)
- 運営手法の効率化(共通データベースに基づく学生・教員管理、電子的コミュニケーションによる会議の削減、権限の分散化による即時対応、対外・学内文書交換の電子化など)

まとめとして、大学の情報基盤とは？



最近の事例：

- 大阪市立大学総合学術情報センター
- 慶応義塾大学メディアネット
- 立命館大学総合情報センター
- 東京大学情報基盤センター
- 大阪大学サイバーメディアセンター
- 千葉大学総合メディア基盤センター構想

図書館員のイニシアティブを求めて

- 教員は、サブジェクト・ライブラリアンとして利用する(当面)
- 情報基盤のすべてにかかわるのは、図書館であるので、図書館が動かないと大学の情報基盤は作れない
- 図書館は、大学の目的と現状を理解して、大学の目的の実現を支援する必要がある